

八  
年  
録  
五  
編  
二

~ 13  
3567  
22

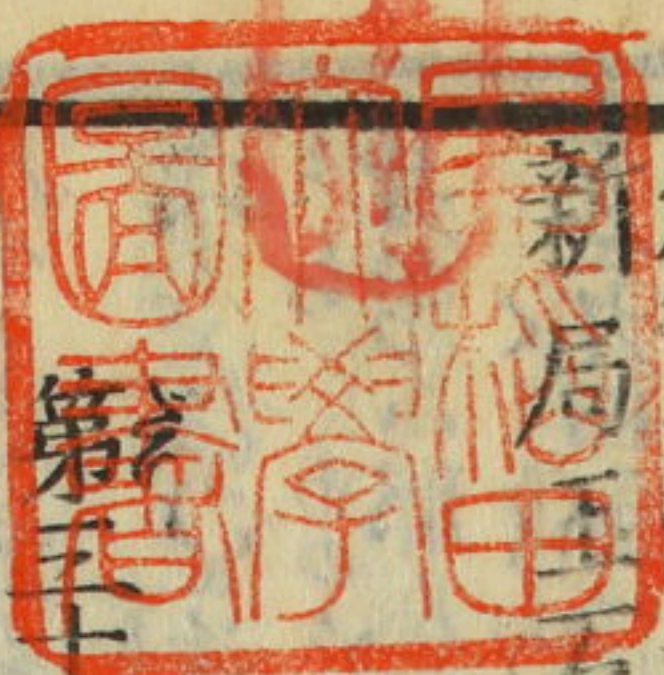




門 へ 13  
號 3567  
卷 22

早稲田 大學 圖書館  
昭和 34.6.3 裝  
藏 書

新編 石童子訓卷之四上冊



東都 曲亭主人人口授編次

七箇

成勝通能遊歷して東路小赴く  
暗賢松下小睡てく 蜘蛛小吞る

登時九四郎ハ染六ガ陳ト身。財囊の金ト遞與サ下ト。後方遙小投遣ける。照  
朱之从ガ汝ト挑争ふ折財囊の金ト遞與サ下ト。後方遙小投遣ける。照  
月猛可小雲隠れて四下暗くらりといへ。折朱之从の支黨の躲居ける者  
ありて金子ト小石ト入易さる。汝是も亦知るべから。思へども倘果して支黨の所  
為る。六徑小財囊ト擡擲ひて逃も躲もまへ。小人ト欺く便直りと金子小  
石ト入易さる。何等の意を解あかざると詞急迫多し。論まれば落葉も。推察  
て九四郎乃祢園の。開へ左まれば右も。あれ素より那金三百兩ハ。朱之从の為小と。謂

三二五 卷之四上冊



へく遞與去一。非如所要と果さざとも又他がみ入りて六断縁金と思人の情  
 くもあらざり。故何とるべ他が主君より與り來る。沙金二百一包残り。俺家小の  
 了と如来様の示教ふよと梅雪信女の柩と共に六田の河邊に瘞りて。その那  
 作佛の志願不因る。その朱之女の爲るれも其沙金と那圓金と交易ある  
 と思へば之の後安らんと論せ九四郎うち笑ひて開け只是婦人の仁の佛意  
 然もあるべ。それとも朱六が怒小那金子をとり復さすとそ及く金子と失ふ其  
 財囊とのもて取ふれば鄙語の公壁と返して櫃を留む者ふ似たり。倘他  
 人をとり是をいひ。朱六も疑ひるはあらざ。然れ件の百九十五金六。咱も必贖  
 ふべ。とのと落葉のゆあむ。その又要るは理論之俺世帯とある譲らと思御  
 身も小那金子と贖はせて何かせ他人か。それゆゑの似け多くせはるか。と論  
 事を九四郎推復して猶云云と論まを杜四郎諫ていさす。其美へ今宵小限る

べくど短夜なれ。酷く深き明日又商量あるか。と云ふは執も其信小良人を  
 る言葉で落葉と納戸に案内とされ。朱六も兄の意見の理りる。感服を  
 重て復を詞も。咱もへ店小寝宿んとそ帚とて来き掃りどま。乙藝へ  
 勤しは臥草履も之所へ配る。三張の襦垂て。各枕小就けり。任而其詰朝十三  
 屋の炊事櫛工等へ乙藝が赦小あひ。夏九四郎も恙なく歸御のうと。知りて早  
 旦小冬來おければ薪水の事小其人あり。早飯既小果一か。九四郎へ落葉乙藝杜  
 四郎。朱六等と皆納戸へ招取へて。又只昨日金子の夏を惜やふ談を。あやう上  
 市の奶々。彼の人那。百九十五金。其盗見と知り。さう復し。さうある。朱六が  
 怒る。御身へ慈善の心ゆ。朱之女の返し遣ねと思へ。惜る。と宣ひ。俺夕  
 く。夢あつたねと。銭財のめいも。親し中。中も言品出来て。供小疎く。做る者あり。死  
 任候を磨く者へ授受明白る。それ乾見假子も。従ひ。何をてよく人を制せん



其の故に朱六が失ふる。一百九十五金の内中、俺百金を贖ふて、目今御身の  
 返さる。といふと、落葉の推禁めく。开ハ又御身の一徹る。と云や。昨宵のい  
 のそが、拙木の家を嗣せんと、思ハ御身の損被て、其百金を受えん。況那金子  
 亡る。朱六の福の惣教、怨る。及俺も親俺渡ま。財囊る。孫那子を  
 外口の無理る。人へのねると失ふ。比皆是時、運由ると、秋の只ら捨措  
 のひねと言、叮嚀論せども、九四郎听を頭と掉て、开ハ辱に御心る。人の養嗣  
 たる者、其家小益あらせて、減さる。拵らる。其養嗣、甲斐の然る。今  
 俺們夫婦、小弟の所以といふ。いも、養家小贅らる。養果二百九  
 十五金の損と、あも被さる。人史誰の益ある者、と云。然ると、別那金子の内中、御  
 身百兩、他借して、朱六の借。渡與のい。らる。其金子、まも今返さる。  
 守の御善政と、空ふ。一。單御身の。る。と云。俺も亦百金の債ある者、似

たり。必ま推辨、あひと。と見えて、勇む。俠氣、落葉の竟、争難て。又、いも  
 る。のけり。當下、九四郎の懐る。長財囊より、金二包と、合出。く。四郎、朱六、皆  
 向ひて、い。昨日も、既告。如く。這金二百兩、治比の大人。と、賜。中  
 五千金、四郎、腕子、五千金、朱六、あも、武者、修の、路費、おせ。と、取。せ。所  
 又、五千金、子、無林寺、布施。と、く。五千金、俺、九四郎、賜。物、即。是。是。を。と  
 俺、五千金、と、朱六の、五千金、と、合。く。百金、目今、乙、藝。が、奶。々、返。し。て、那。債。を  
 贖。ふ。一。猶、九十五金、足らね。も。开。ち、奶。々、の、慈。善。る。那。沙。金。と、交。易。を、朱六、の  
 取。せ。と、思。れ。恨。の、あ。り。勿。論、朱六、が、路。費。の、俺。別。調。へ。起。初、折。の、渡。與  
 ま。べ。四郎、腕子、の、五千金、目今、渡。一。参。り。て、と、云。と、社、四郎、推。禁。め。て、否。其。金  
 子、とい。そ。の、要。る。啓。初、の、日、也。も、好。勿。論、俺。們、不。が、修。の、路。費、の、五千金、足  
 足。り。ぬ。べ。逆。旅、の、財。貨、尋。ふ。は、是。福。を、招。く。小。庶。幾。と、辨。へ。朱六、も、俱。の、云。



昨宵咱もさう復へる。財囊の反て仇と徹りて斯まで切勞と被せし心苦  
 老死涯り多ふ何で路費と欲まはせ術と計ひぬねと勸解れば九四郎點頭て  
 然での商量整をちのそくとひらも先一白は金子と合て故の如く長財囊の効を  
 残る一包を傍小ありける團扇小載て卒とて落葉の遊興まゆを落葉の左右を  
 く受難て猶云と辨へとも九四郎敢兼引き来六亦杜四郎も俱小薦めく  
 己されば乙藝の孰を孰とも分るよりく慰難て心苦く思ふの黙然とく  
 在り一程落葉の中やく件の金子と受戴せし涙晴て非如何とひるとも  
 今這金子の情由さへ受へる思ふねとも受ね人の志小恃るとあると争何  
 せん受ての後小左も右も又せんこのありぬへ。好意と戴せたり乙藝宜く憑  
 をぞと謝して財囊へ件の金子と納めて項小拭る折ら炊婢が来て告を言ふ  
 上市る村長の今朝風より落葉と酷く俟托て伴當二名を従へて且兩個の

轎夫小落葉が仍轎子と吊せり。索て十二屋へ来ゆれば落葉の九四郎乙  
 藝と俱小遠く出迎へて奥るる坐席小請登る先茶と薦め果子と薦  
 む。主人夫婦が初対面の口誼も稍果一時落葉の村長小向ひてのさう奴  
 家へ今朝風より歇店へ還るべりふ迎の後轎のいさぎ来ぎ且奇事のわり  
 記憶を時を想へ其故の箇様々々と乙藝の實の女兒をいせ送小知ら  
 未知らまをさく。環會けは崖巒を叫き告く又いさう是等の内縁ある  
 られば這夫婦を上市へ喚とて杉木の家と嗣せま欲ある。商量もあゆり  
 めたの爰と飲びぬか。と説れて村長堂と拍鳴る。叶芽出さるる開の料ら  
 る供福へ御身が老実慈善多も是まで善報のあらで朱刀袷の無頼のへあ  
 る。芥柄少女の夭折を最悼き思ひ小幼稚時小生別あり令慈及主婦環  
 會のつは是則陰徳陽報御身の慈善と薄命を神佛の憐れの利







這席のくるむ村長の伴當轎夫も、款待届る所多、各飽て辭ふ時  
 住吉の神社で吹鳴まき午の貝の遠音、遙く響き、當下落葉の九四郎と  
 乙藝と召て別を告げ、九四郎乙藝の留めあざ、俱に異日と契りての事、切々  
 猶兩三日も留めまらま、思へとも、御一路人のあつた、人小仕まる留守此宿の  
 心許りと宣され、今ゆふ力及び、四郎、六が起、目送果、乙藝と  
 大和へ参ら、時宜小より、九四郎も共侶と思ふ。一霎時の御別、小へ通  
 路酷暑、凌びて後の便を俟ひねと言語、齊一慰めて、九四郎が家裏る、係  
 安藝半紙、幾十帖とも、製の木櫛十枚有餘と、土産小と、橋夫、渡と、轎  
 子小容措、又村長、土産料、一裏の人情あり、その餘伴當轎夫も、送  
 る、取、裏錢、仍届たる、御食應、小皆、欽する者も、る、告別、さ、散動、ぬ、た、て  
 草鞋と更て立程、小落葉、今ゆ思ふ、の、ま、ま、れ、と、嬉、し、い、と、又、悲、し、い、と、胸

空りて詞、寡く、村長、あ、ち、續、た、り、立、出、れ、杜、四、郎、と、采、六、を、孟、林、寺、へ、入、ら、し、め、  
 途、ま、是、を、送、ら、し、身、装、ま、て、出、て、來、り、落、葉、村、長、小、別、を、告、ぐ、轎、子、の、後、  
 方、小、立、程、の、九、四、郎、乙、藝、と、首、を、炊、婢、も、櫛、工、も、皆、店、頭、へ、立、出、る、目、送、は、  
 采、の、故、郷、へ、飾、る、秋、の、錦、を、ら、て、冬、樹、の、黄、楊、の、櫛、店、舗、小、惜、別、の、峯、張、の、岐、  
 岨、小、異、る、大、和、路、も、同、山、路、を、想、像、る、乙、藝、の、小、夏、早、日、小、出、し、身、親、の、轎、子、の、  
 見、え、ま、る、ま、暮、れ、て、立、盡、し、て、奥、小、入、り、け、る、恁、而、是、日、九、四、郎、の、六、市、四、摠、が、未、  
 ぬ、及、び、て、昨、宵、も、あり、奇、事、と、送、り、説、小、采、六、市、四、摠、の、駭、嘆、と、朱、之、  
 小、憎、む、日、屬、小、倍、て、甚、ま、る、更、小、落、葉、の、誠、心、と、感、じ、暮、し、思、ひ、け、り、左、  
 右、旁、程、小、未、過、時、候、小、做、一、然、九、四、郎、の、孟、林、寺、へ、詣、ん、と、て、這、回、安、藝、の、り、の、  
 來、り、土、産、物、一、裏、と、伴、當、四、摠、の、各、を、と、俱、し、件、の、寺、小、赴、り、任、持、  
 本、委、小、見、参、杜、四、郎、と、采、六、も、其、席、を、わ、り、け、る、當、下、九、四、郎、の、木、委、小、拜、向、て、





七

二賊一婦  
 人夢小正  
 覚と示を

この所の本文十  
 の左りに見えり









後入とも後住の為小反て益あり。枉く這意小任きてと諭ある件の五十金と  
 開か儘茶六の遞與り六茶六を受戴して感謝不堪む。杜四郎と俱其  
 歎ひと陳て九四郎を諫る。少七九四郎僅小頭と拾け。師父の清談理に當  
 然然て六脱る路あらむ。權且借用仕え茶六の實を寫さ。といふと木玄推  
 禁め。いふてかへ實小及人貸へ俺心へ借る人の心へ幾教通の事ありとも  
 借て返さざる争何の甘人又一初のみ実多とも返を人の必返え況法師の物と  
 貸小其人と疑んや已終くととと掉ば九四郎の之感服と。師父の大量今此  
 世の出家人未更くわが。以取へ取れば廉と破る。以取るるはへ。取らざれば  
 惠と破ると孟子のあつと總角の時讀しと思ひ出る。俺へ反く及ぶ。師  
 父亦義士なる哉御意美でいひぬと稱て拜謝をさける。姑且あや杜四郎の  
 九四郎の談る。咱も家尊の大人の病臥と傳り。其日より千里の路も一

時小走りぬき思へとも大人の消息ある存り。いさ一功もあらむ。治比へ入  
 正と許さる。然る今番の武者修初の故郷へ還る首途一日の餘り起す  
 く欲む。這美を計ひぬねと父を九四郎らち歩て開き理りぬ。一月半  
 総の逆路る。六啓初といふ所もせめ幾を涯りと量知られぬ宿旅小去向と  
 そこの要する。三伏果て孟蘭盆まで俟へ必談熱醒る。朝夕を涼からん。  
 其折まふ起初の準備とこそ仕らぬ。といふ先懐より。圓金五十兩と金  
 出しく是と杜四郎の遞與りて父を。茶六も少い。主僕の盤纏と合さむ。  
 正茶是百兩あり。馬轎小乗む。粗飯と厭む。旅宿小儉約と旨とせ。立  
 六総の柱へ。四郎腕子へ才子へ俺言と俵ぎく。萬事小なるるあるべし。  
 茶六も少く慎む。孰の御小造るとも比皆敵地の思ひと做て賊難と防ぐ。  
 色小惑む。飲小道すれ。才あるもの欺も思ふるとも侮らむ。主僕心と一緒小



世の英雄と交りて功を返るるは其の長をあらぬと論せし四  
郎も末六も共侶に感佩して教訓道理至極せり胆を銘とて忘るるも  
遮莫百金の路費もまゝ半分の留めて大和へ赴く所用の御成り。と  
末六の五千金と九四郎のふも觸れ推戻して不其金子の治比の大人と當  
寺の師父の和郎達へ餞別し御成り私小用いんや益々とと害めて猶  
餘談小及ぶ程の木玄も其美と感と急小當ら鳴と本論と召せ茶を  
看と菓子と薦ととて数待を程小没日刺風も涼しく御成り九四郎の本玄  
軟びと舒別を告ぐ四摠と行く邊へ家路と投て退りけり然るは熱と是  
等の事と傳ゆしあの日より四郎末六が起ゆと自親も大和へ赴く準備小衣の  
解洗して襪袴刺せて不鳴虫の鳴ねとも縫刺小暇のあつて夏過て七月中  
旬小御し時候又少一の奇事ありけり其故と原る小異小浮世代衣屋暖簾次へ

鍛冶郎と今様の悪事ふりて罪と免とせ久考獄舎小敷末まで馳鳥太吹  
五郎と共侶小携問緊しかりけれとも馳鳥太吹五郎の死と究めて詭詐と  
人と誣去暖簾次が為小直言と他へ鍛冶郎が騙賊りりと知るも又今様  
が鍛冶郎の悪と幫助すと曉ると只目前の利小惑ふて今様と貸小協のそ  
其悪意あつるも又俺們素も是と知りぬと陳とて教回の携問小毫も言と  
変ざりけれ木玄頭職善の竟小其疑解と七月の初旬小暖簾次と獄舎より  
饒り半して家小屏居在せけり左右も程小馳鳥太と吹五郎の那身小刀瘡  
ある上小數日の呵責小其瘡破れて遂小破傷風小御成り俱小獄舎小身故  
けり。この故小梟首せられ職善下知して作の兩個の亡骸と俱小市小棄さるる  
則暖簾次と乳守の里長もと召よせてみづる作の趣を云云と言示し且  
小中。暖簾次へ鍛冶郎の悪事小與せされとも今様と貸る罪あり。這故小



賄銅百貫文と献てての軍用元へ。又小槌の今様小使れる。兩個の小三枝  
 打出の早歌丁兒の調子の始より支の仔細と辨知らる。且年之五未滿の僅女  
 れが俱小罪と饒走し。と旋る賞罰是中果ふけり。介程の十三屋九四郎の  
 人の噂小件の一をを。知り感と已む。悄地小旃陀羅小相譚ふ。駝鳥太  
 吹五兩個の屍骸と柩小斂め。是を昇せて。当晚孟林寺送り來て住持木玄  
 と杜四郎末六木訥等。ふのを告知らる。又い。俺意ふ低杭駝鳥太  
 狸毛吹五郎の鐵屑鍛冶郎等。か。死強人れども。俱小義侠の心あり。最  
 期の正念殊勝也。其招了。敢善人を誣ま。あ。り。朱之。成。と首。て。二  
 六市四摺暖簾次小至る。皆疑獄を免れ。我小功。り。と。甘。む。の。故。小。俺。憐  
 思。ふ。件。の。亡。骸。と。當。寺。の。境。内。小。葬。ら。り。欲。ま。の。を。と。饒。ま。せ。め。り。と。憑。め。り  
 水玄點頭。俺も亦始より。那二賊の誘らる。粗知れり。悪縁れも。其亡骸と

葬る支の厭から。但墓所小憚りあり。門外。の。藪。蔭。小。埋。む。べ。し。と。饒。ま。り  
 九四郎隨即旃陀羅小課せ。其地と深く穿せ。兩箇の柩と埋葬る。あ  
 沙弥木訥等。美り。安葬の讀經あり。木玄も立。出。り。是。と。引。導。寺。を。り。け。り  
 其次の目より。大江杜四郎。峯張末六等。為。小。施。主。小。做。て。寺。の。門。前。の。石。工。小。課。せ。り  
 無銘の五輪石塔波と造立。駝鳥太吹五郎の墓表小あけり。又住持木玄ハ  
 那時より。藏置。る。今。様。か。頭。髪。の。杪。と。他。が。生。前。の。願。ひ。の。隨。意。高。野。山。の  
 骨堂小斂んと。柿八小吩咐。寄進の黄白。齋。し。て。紀伊國へ遣。し。け。り。左  
 右。ま。る。程。小。孟。蘭。盆。會。小。あ。り。木。玄。ハ。又。近。村。の。僧。徒。を。更。く。招。會。せ。て。駝  
 鳥太吹五郎。今。様。が。為。小。施。餓。饑。の。法。會。と。修。行。表。け。り。是。日。も。杜。四。郎。九。四。郎  
 末六等。又。施。主。小。做。り。と。衆。徒。小。齋。を。薦。め。る。と。も。結。縁。の。為。小。參。詣。齋。會。老  
 弱男女極。め。り。既。小。老。法。會。果。り。其。夜。分。住。持。木。玄。の。憂。ふ。今。様。駝



鳥太吹五郎号が在り一世の姿を俱不枕上亦多稟まや。俺們三人の前世  
悪業よらて。竟其死然をゆき身と白又亦申まそ。死して地獄に墮るべし  
ま不禪師大慈悲の引接よらて。解脫清果の洪福あり極樂浄土に到る事  
疑いなく是見ゆべし。思へば俱不身を轉く忽地三茎の蓮花不  
変く。西の麻糸にて失ふべし。當下木玄驚き覺く。單其支を思ふ不有亦似  
たり無亦似たり。折々轉る上まの音とや。徐不數まば正不丑の時や。あはる  
其詰朝木玄四郎采六木訥考不這奇夢を説示せば駭歎せざるは俱不  
佛法不可思議の妙要を感得る。よの比又住吉の里に今様とよく知りたる者  
あり。九四郎の語道那今様の容止美しく心操も風流て平生不歌を好む  
詠けり。何ぞ折也。あはれ何竹の浮節敏系くて夜毎不替る枕の敷の定めを世  
果敢る事。今宵誰が来てやゆら敷えの枕に知らぬ吾もさる不有。恁る風

流せる事。其心の惑ひを。際所宜からむ。惜むべし。其生涯と諺に彼  
愚中て。此小賢と云ふ事。是成就て又一話あり。近曾東不隱沼と喚做して才  
圃なる名妓の老て女僧不做りたるあり。書讀むを好む。かある人當春世不見  
ま細人の瑣言せる隨筆の刻本とて来て是見ゆとて貸る。これ受て是を讀  
見る程其入又訪来て那書の好むを問ひ。隱沼の女僧答て。かやう已に知る。曲  
學者の忌憚所る。人を人も思ひ。これ孰は是冊子とて見。亦只一書一説と  
信容れて古より人のむして傳て。證文更なる故事と評するものあり。或はま方位と論  
ま不今の曆日にも載る。金の神八將神など取る不足らむと云ひ。過當の浪  
言。抑方位の近曾唐船の載來ゆる通書。又も術者の世俗と恐嚇を  
者。豈只金神のまら。尙方位の用捨と論せま。欲さ。唐山も通書と説  
看破りて後不。意不這編者。唐本とを讀うべくもあら。其



薄の聊る文と見て知り。況巻と成ると其考證ある條へ竊人の説と取  
 己が説おぼゆる多し。又近曾高名家の戲票粗地名の辨あると酷く誤りて道  
 権の歌と證おぼれと廻函雜記も證歌あり引き并引ハ己が説の窮る故又東  
 鑑も證據あると知りてなるや。馬の怨ある故歎壁言へ陳壽の諸書  
 武侯の舊怨ある故蜀志の列傳小軍旅のの拙と。識で心術の同トとのん  
 過ら或ハ又孔子の言と引て論語と中庸とを何を疎忽する人の非と云々欲先  
 已と正しく詳おぼえ。這他珍説と思ひて話も遼東の豚似るの云々其  
 文の杜撰る假字づひの孟浪るげりけるけれの天介遠波も知らず是等と云  
 ありとも。うさうともいふれと四巻ありけると僅小二巻見て其似而非冊子返  
 きて戲笑歌とみて遣一ける其歌。假字づひ天介遠波も叨る生まのあは  
 生著述哉又浅つまるるも知らず人の非と云つたね夕口の鼻さよ。世あか

如た才女あれども其香臭の心つたる。只其形状の似るを見て甚心甘園も苾苾も  
 一草とと思ふもまらべり。て辨はまのあまをいとのひける。是後の説説之小程小  
 残る早の消退して七月二十日あまるおぼゆる。大江杜四郎成勝。家来末六郎通  
 能ハ武者修徳の首途の心只管いそぐて俱小吉日と擇とつ。住持木玄小別と  
 告て身の暇とこく木玄則其美と許と柿ハとて送らまる柿ハち高野山  
 上の既かへて寺小在の四郎茶六が為小所要の袂包と駝も多引提も多十二屋  
 まで従ひゆく。然木訥と首とて同宿の沙弥等別と惜とて是と目送のけ。是  
 日亭午の比及小杜四郎茶六も俱小十二屋小来小九四郎乙藝の豫も準備と  
 待て在の柿八を勞ふて晝飯と喫せるとと折乾銀錢二箱と取せて寺へ還遣却  
 四郎と茶六奥坐席也酒飯の儲の萬里の首途を言ひて去向の小心と教誨  
 其の秋の九四郎も乙藝と俱小大和色く死すと説示しをまき這席のくる日暮



其言嚴密を送別と惜むの然とせざる逆旅ならぬと杜四郎と朱六も其曉小  
 頃覺えて早飯果て俱小旅装束路費の金子を各勤吐小斂め或は肌衣の襟小  
 縫入たるものあり杜四郎が両刀の那身小併り一時父弘元の賜りたる大江家傳の名刀  
 又朱六が両刀の父通世を送刀を其の孫六もあつて裏重かみ路の煩ひるれども  
 俱小身輕小打扮て油衣菅笠を外小所要ある袂包と背小あたるもの恁而其詰朝杜  
 四郎朱六も先京師を造んとて藝小年未愛顧凌々所の<sup>一</sup>快と舒且別と生見  
 草鞋穿締て立出れば九四郎六市四摠と徒へてみづから浪速まで送つて竟小秋と分  
 らけり是日杜四郎朱六も路と走るゆ十二四里もあて又蠅く京都小来小ければ姑且這  
 里小旅宿を日毎小出て浴内浴外る各所古跡を遊覽も憶小秋を送る程小  
 當時近江の觀音寺の城の佐々木近江判官高頼在任を六角殿と稱せり其  
 家累世武功多し大諸侯をければ敏系昌西の都る大内家の鶴峯小を及ぶ

威勢室町殿も憚らざる既小獨立の思ひあり一武藝小勝れ浮浪人等那城  
 下小集合來て仕官と求る者少くも況城内も諸臣少く兵法陣列弓馬較  
 劍槍棒白打小捷れ若者多りと少きと杜四郎朱六も卒也是も先觀  
 音寺の城下小赴け權且修小做さるる世の英雄豪傑小值遇さるもの  
 ありと遂小京師と立去て近江の事も思ひ多し話分兩頭小程小未朱之  
 暗賢の落葉が財囊の金と竊とて走りける其夜分峯張朱六も追蒐られ財  
 財囊も奪復えて僅小九四郎が取せり圓金五兩とせければ只得是と盤纏小  
 ちて投て任方小定めども亦小京師小來れども浴内小憚りあれ東山の邊迄も  
 托る歇店小止宿も憶さる伏の夏の日と徒小送る程小單熟思惟小大  
 和る上市の空も然りとこ這様も今小故郷小ありと空を叔與房小便求め周  
 防の山口へおれなう只近江國坂田郡福富村を福富氏の舊縁あり那家衰



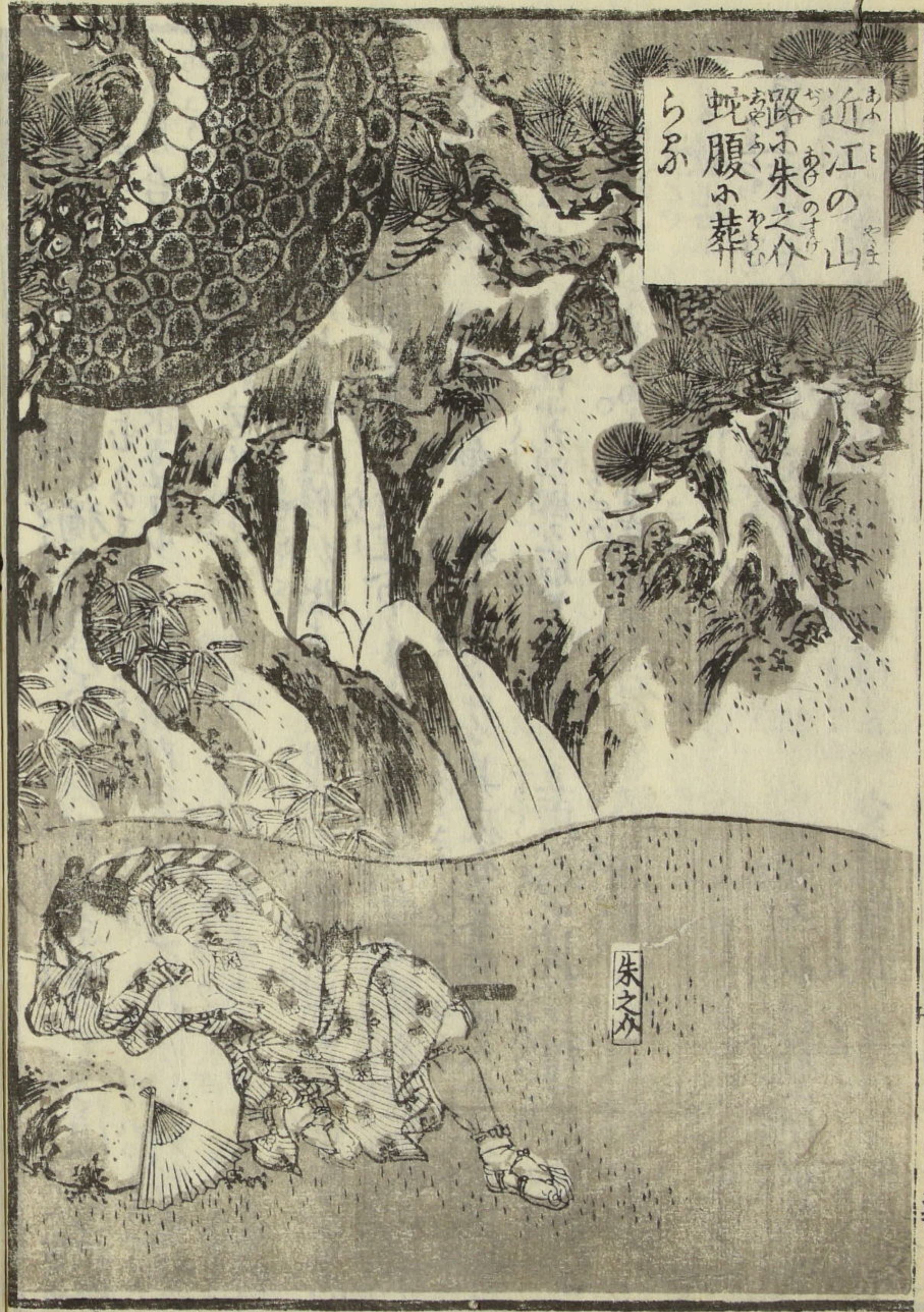


山崎の蛇

十五

草むら

木



近江の山路  
朱之介の腹  
蛇の葬らふ

朱之介

近江の山路

文治堂



果れども黄金の母親阿健刀衾の賽武則で村盡処の小店と開て存りとい  
 父の先や那里へ尋りて身の隠処を做さばやと尋るる短中カを買合て聊身皮を纏  
 圓もて解洗する夏秋の敗衣と一尺五寸を穿るる短中カを買合て聊身皮を纏  
 又阿健へ贈る此の土産物と準備をいかに數日の宿錢と共に盤纏を憑り五枚の  
 圓金の残を纏ふ做りかど近江へ歸國するをいと支足下と思ひ其六月下旬の  
 東山なる歌店と立去りて單近江路を分入る坂田郡の殊さら山又山と連りて去  
 向ふ嶮岨を渡れば朱之介の一日おしくいそ福富村の造りゆき次の日も残る暑も疲  
 果て山蔭なる松の下に憩て憶を睡し程に忽地一箇の蜻蛉あり太き十圍のあま  
 ぐ長さのいそ量知れぬ近に沼より見れ出て松の掛りて朱之介を只一口吞ふ  
 けり畢竟這悪少年が大蛇の腹を葬きて後甚麼を也開へ下回ふとて

新局玉石童子訓卷之四上冊終





